

「感謝経済」をめぐる“風景” 8

～ 市場でも政府でも規制でもない経済世界は ～

“感謝”は消え去り易く？取り戻すことが難しい？

～感謝経済の斬新さ、難しさ、先進さに関する一考察～

今回のコラムは、株式会社オウケイウェイヴが進める感謝経済が、人類が近世～近代～現代までの社会経済システムの考察や分析や、政策面で影響を受けたこれまでの経済の考え方とはどう異なるのか、を改めて考えてみたい。

この連続コラム「「感謝経済」をめぐる”風景“」の最初のコラムでは、約 250 年前に“経済学の祖”、アダム・スミスが著した「道徳感情論」には単に市場経済、市場の均衡だけでない、人間の気持ち、感情の動きから来る経済社会の分析、あり方、あるべき姿、などが提示されていることについて紹介、拙い考察を示した。

(参考：

<https://www.okwave.co.jp/wp-content/uploads/2018/06/Oyama-column-001.pdf>

2018 年 6 月 29 日発行)

かなり乱暴だが、アダム・スミスの分析・提唱は古典派経済学と呼ばれ、「みんなが儲けようと好き勝手に経済活動をするが、それが富の蓄積や分配につながる“見えざる手”での調整となる」、つまり、経済は自由放任であっても社会で経済システムとして自然に成立する、というものであった。その後、経済活動が自由であるべき、経済活動の自由放任こそが社会と世界の経済発展の基本であるとする、いわば、“市場がすべてを解決する”という基本線の新古典派経済学につながった。ここまでは、主要な通奏低音は「市場がすべて」というものだ。

一方で、1929 年の世界大恐慌のあと、経済政策の在り方と絡んで最も注目を浴びたケインズ経済学では、政府の介入も経済の安定には必要で、財政出動などによる需給のバランス回復の調整なども経済の考え方の一つの軸となった。いわば、これは“安定的でバランスの取れた経済活動には政府と規制の役割もある”というものだ。

私は、経済学は社会生活、ひたむきに善良にコツコツと生きている名もなき多くの人々の生活に影響を与えるそのインパクトが大きいため“実験ができない学問”だと考えている。(実際には、20 世紀に、通貨の供給量だけ管理すればよい、というマネタリズムなどが一部の国で実験的に政策の主軸となった例はあるが) “実験ができない学問”の観点から言えば、近代～現代、そして 21 世紀の今、各国は「市場だけでも経済活動、経済社会は安定しない、一方で政府と規制が強す

ぎても経済活動は活性化がむずかしい」という、その二律背反的な要素をどう融合させるか、さらにその“市場と政府（規制）”のさじ加減の模索が続いている、ということだと思っている。

これまでの経済学上の考察や分析では、実はその学問が取り扱う対象は、あくまで財とサービスの効用（財やサービスの提供/供給と、購入（需要面）による消費者や会社など経済主体の“満足”、“満足度”）が中心である。

そこから導かれる経済の分析は、その後のいわゆる金融資本主義、様々な経営学の思潮なども含め、多くが、“利潤最大化”“利益極大化”の目標、ゴールを目指す考え方が根底に一貫して流れているテーマでありテーゼであることは論を俟たない。

このことは、人間の経済活動が功利主義的でプラグマティックで物質的な既成概念というべきものに囚われていることから逃れられない、という、人間を“経済合理性の動物”と定義することを前提とする。

21世紀に入り、また、ここ数年注目を浴びる巨大データをハンドルするプラットフォーム的（※「的」という文字をつけた点に留意してほしい）企業、GAF（グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾン）などは、これまでの経済、企業活動を徹底的決定的に質や量やコンセプトや技術面で凌駕した、ITを駆使した新産業の雄、チャンピオンのように形容されるが、実はどれも、情報という新たな付加価値の泉を基に、IT技術を駆使しているが、一方で、やはり、財やサービスからの（情報という貴重な、広義のサービス提供も含む）利潤最大化、利益極大化を目指す点では、“古典的な経済活動”の域を出ていないと、やや乱暴だが考えることもできる。（もちろん、「データは21世紀の石油」という言葉の通り、データの管理、整理、活用が利益の源泉であることは自明である）

GAFなどの企業群が、プラットフォーム保持といういわば生産活動での決定的な優位性の環境を独占的に持ち、天文学的な量のデータを集め、広告や課金、物流手数料などで、利潤最大化、利益極大化を20世紀までの産業とは比較にならない幾何級数的スケールとスピードで進めたことが事実である一方、その独占的優位性がITを駆使した新産業の他の参入プレーヤーを圧迫したり、個人情報扱いについて、経済とは別の観点での社会性の面で疑問と課題を指摘されるという局面入りしたことは過去1年ほど報じられている通りである。

この、21世紀に入っての新産業ですら、情報ベースにした、財とサービス提供（広告収入も含んで）の産業であり、それは金銭と価値（効用）のやり取りの従前の経済のシステムや枠組みを抜け出し、突き抜けた、とは言い難い。

株式会社オウケイウェイヴが目指す「感謝経済」は、こうした従来の経済学や事業がモノとサービスの効用と市場原理を想定していたものとは様相を異にする、というか、考え方がまったく違う異質なもの、ということもできる。

人間の善意、感謝の気持ちを伝えたり、多くの人に感謝される場合の（お金の価値とは違う次元で）、「ありがとう」という言葉と気持ちは、ほとんどの場合、いわば空気の中に消えてしまって、その感動の気持ちや時によってはカタルシスにもつながる人間のいわば哲学的、形而上学的な部分のものはあとに残りにくい。しかし、感謝経済は、その、あとに残りにくいものに注目する。感動や感謝を何とかスコア化、数値化、定量化して、その価値を古典的な貨幣、さらには古典的な貨幣とは異なる暗号資産（暗号通貨、少し前までは多くは“仮想通貨”と表現された）の新たな普及をも視野に、社会秩序に則ったより良い在り方を模索する経済の考え方である。

であるがこそ、多くの人に理解を得られることは容易いことではないであろう。

21世紀に入って先進国経済が直面した、意図的な法定通貨の政策的過剰流動性政策の限界（先進国の中央銀行の近代経済始まって以来の異様で異常な量的緩和策の行きつく先への不安）もいよいよ議論される中、これまでの“経済価値”とは様相を異にした、人として、人間として、社会人としての素朴で素直で他意のない感謝の価値化は、空気の中に消えてしまう前に形にしなくてはならない、との“感情/気持ちの動物である人間の根源的本能的要請”の発現と解釈してもいいかもしれない。

それは、芸術や音楽から受ける感動や、言葉に表せない、表現するのも難しい“心のサムシング”を何とか掴みたい、“見える化”できないか、という、実は人間が太古の昔から持っていた感覚や感情の初めての具現化を目指すものなのかもしれない。

消えてしまって、あとに残すことができない感謝を何とか形にしたい、という、感謝経済の在り方を考えるとき、私は、音楽芸術のジャンルの一つであるジャズ、そのあるジャズミュージシャンの言葉がいつも頭の中を駆け巡るのである。

When you hear music, after it's over, it's gone in the air.

（拙訳）一度空中に放たれた音楽（を聴いた後）は、音楽が終われば、その後は消え去ってしまい二度と取り戻すことはできない

(ジャズマン、エリック・ドルフィー Eric Dolphy のアルバム「Last Date」の最後に収録されているエリック・ドルフィー本人の肉声発言)
エリック・ドルフィー＝バスクラリネット、アルトサクソ、クラリネット演奏の“鬼才ジャズマン”、1928年アメリカロサンゼルス生まれ、1964年西ドイツベルリンで36歳で病死。

【株式会社オウケイウェイヴ ミッション (企業理念/目的)】

互い助け合いの場の創造を通して、物心両面の幸福を実現し、世界の発展に寄与する



株式会社オウケイウェイヴは2018年4月、より多くの人々が活躍できる社会を目指した新たな経済圏『感謝経済』の考え方と、その実際的な経済活動具現化のためのプラットフォームを開発した。2018年9月以降はこの事業に国内の20社を超える企業や団体も参画し、新たな概念の事業が注目されている中、できるだけ中立的に、「感謝」と「経済」、「互い助け合い」と「経済」の在り方、新たな社会と経済の在り方などを、月1回のペースで、「感謝経済」をめぐる“風景”と題して、コラムを連載し、所感や考察などを示していく。



大山 泰 オウケイウェイヴ総研 所長

1961年東京生まれ。一橋大学経済学部卒。株式会社フジテレビジョンで経済部長、経済担当解説委員、等を歴任。BSフジ「プライムニュース」など報道番組で経済解説を行う。内閣府/公正取引委員会「競争政策と公的再生支援の在り方に関する研究会」、農水省「政策評価第三者委員会」など、複数の政府の有識者会議等の委員を歴任。